美琴と巫女とは好敵手？

樫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
美琴と巫女とは好敵手？

【Ｎコード】
Ｎ０２２１Ｑ

【作者名】
樫

【あらすじ】
幸薄き少女がここはちょっと根性出してみるお話。

薄幸少女は何を思う。

１２月３１日。２０：００。

姫神秋沙は自室のテーブルに向かい、携帯電話を眺めていた。画面には電話帳のデータ。とあるクラスメイトの名前が記されている。これは本人から教えてもらったものではない。

１時間程前である。件の姫神は部屋の大掃除を済ませ、一休みしようとお茶をすすっていた。ソファに腰かけて、ぼーっと1年を振り返る。

（今年は色々あった。特に…夏のあの日から。二学期からは。転校もしたし。）

あの日、というのは簡単に説明すると、彼女が錬金術師に囚われていたところをとある少年と赤髪の神父に助けてもらった日である。

（あの後私は。あまり出番がなかった。あ。これは違う。）

（大覇星祭では大怪我して。ナイトパレード。いけなかった。）

彼女は大覇星祭という能力解禁万歳な体育祭で、侵入した魔術師に勘違いされた挙げ句、襲撃され、大怪我を負ってしまった。奇しくも赤髪の神父にまた命を救われた。

（だから一端覧祭こそはと。意気込んでみたけど。またあまり一緒にいれなかった。）

彼女には何かイベントを一緒に過ごしたい人がいるのだが、これまで数々の事件が彼女のささやかな夢を悉く砕いていた。何でもよかった。ほんの些細なことでいいからその人と過ごしたかった。

そんなこんなで年末を迎えてしまったのだ。今年やりきれなかった、唯一のことを残したまま。

（このまま。年を越すのは。嫌だな。でも。彼にも予定がありそうだし。でも、もし暇だったら私でも。）

彼女が一緒にいたい“彼”は大勢の人をひきつける、そういう体質なのだ。だから今日だって予定があるかもしれないと思うのは当然だ。

大覇星祭の頃の彼女ならあっさり諦めていただろう。しかし“彼”といる事に引け目がなくなっているのを自覚している。大覇星祭で

襲われる前に担任とした話、入院した時に銀髪のシスターとした話のおかげかもしれない。今なら“彼”を誘えると思い携帯を掴み電話帳を開いた…

…のだが、通話ボタンが押せないまま結構な時間が経過して今に至っている。やはりどこか自分より一緒に年越しをしたい人がいるかもしれないと思うと怖かった。“彼”にとって一番どうでもいいことのはずなのに、何故順番なんかつけてしまうのだろう？などと考えてしまう。

でも、そんな自分と本当に決別したい。ここで変わらないと、この先ずっと変われない気がする。あの時のシスターの教えを無駄にしてはいけない。そのためなら今日はいい機会なのかもしれない。そう思うまで時間をかけすぎた。その間に先約が入っていたら悔やみきれない。

彼女は恐る恐る通話ボタンを押す。幸い通話中ではなかった。コール音が鳴る。　そして…

…『はい、上条ですけど？どちらさまで…？』

「もし…もし？」

『えーと…姫神か？』

「そう。このタイミングまで。私の番号登録していなかったのね。

はは。」

『いやぁ、そのだいぶ昔に電話していただいた時には電波悪くて誰かわからないままにですねぇ…ごめんなさいでした…』

「まあいい。それより今。何してるの？」

『今？今は絶賛大掃除中だけど？片付けても片付けても職業家事手伝わない某シスターさんがね…ってがあああ…』

「そっか。」それなら仕方ない。忙しいんならもういい。私は頑張った。

『で、何か用か？』何やら涙声になって彼は尋ねた。

「ううん。なんでも。よいお年を。」

『ああ。よいお年を……って、そんだけ？』

「……」

『何かあるから電話したんじゃないのか？』

「……」

『姫神…さん？俺何かしましたか……？』

ここだ。今しかない。行け。自身を奮い立たせる姫神。

「あの。掃除終わったら。暇？」

『んー？もちろんバッチリ暇ですよー。ってこれ自分で言っててなにか寂しい気分になったんですが。』

「も、もし。よかったら。初詣にいかない…？」

ほんの少しだけ、むしろ一瞬訪れる会話の間。姫神はとてつもなく長い沈黙のように感じた。

『おー。いいなそれ。行こうじゃないか。』

「え？」

『え？って誘ったのは姫神さんじゃないんですか？』

「え。あ。うん。そうだけど。まさかオッケーしてもらえるなんて。」

『わざわざ暇なところ誘ってくれたご厚意を断るほど上条さんは付き合いの悪い人ではありませんの事よ？』

「うん。なんか。ごめん。」

『何に謝ってんだ？姫神は何も悪くないだろ？…とにかくまずは掃除終わらさねーと。』

「うん。じゃあ。１１時くらいに校門でいいかな？」

『わかった。あ、』急に小声になる上条。

『これ、もしかして俺が一人でいった方がいいのか？』気を遣って

くれたのか？まさかの質問だった。そんなのは願ってもないことだ。しかし、彼女は

「空腹自宅警備シスターが一緒でも。いい。」

別に彼と2人きりで年越しを過ごしたいという願望ではなかった。ただ、何かしらイベントを通じて彼の住む世界の中へ深く入り込みたい、と思っていたのだ。それが彼女なりの「彼の事が気になっている」ということだろう。もっとも、それ以上の感情が全くないとは思えないが。

『わかった。じゃ、楽しみにしてるなー。』ぶっ。つーっつーっつーっ…

しばらく彼女は硬直していた。放心状態といった様子でしばらく携帯電話を耳に当てっぱなしだった。一年の最後の最後に、やり残していたことをやれる、この上ない充足感に、姫神は小さく両手でガッツポーズをしていた。

超能力者は何を思う。（前書き）

相変わらずお目汚しですみません。

超能力者は何を思う。

同時刻。

常磐台中学の学生寮。ベッドに仰向けになり携帯を眺めため息をついている女子中学生がいる。

御坂美琴。学園都市に7人しかいないレベル5の第3位。

彼女は仲の良い友達と年越しを共に過ごす事になっている。

（みんなと過ごすんだから、不満なんてないはずなのになあ……はっ、私ってばやな子だな…）

（で、でも、ちょっとでもいいから、今年のうちに…会って話したいなぁ。ていうかそもそも帰ってきたんなら一番に私に連絡しろっつーの。）

彼女が会いたい人は一端覧祭の直前に学園都市に帰ってきていたのだが、未だ一度も話せていない。

（でもなんか今さらなのよね……なんかもうどうでもよくなったのかな……？）

その彼が帰ってきたのを人づてに聞いた時には死ぬほど安堵したし、涙さえ流した。どうでもよくなったことはないはずである。なのに何故かメールも電話もしなかった。いや、できなかった。

最後に彼を見たとき、彼はまだやることがある、と助けにきた彼女を置いて姿をくらませた。その事が、何か彼に対する壁を作ってしまっていた。

（だーもう、散々落ち込んだんだからもうウジウジしない。私らしくないっつの。）

そう思い彼に電話しようとするのだが、先ほどから通話中なのである。

（くそ。私には電話しないくせに。）と強がってみるが繋がらないものは繋がらない。

その時、ルームメイトが帰ってきた。ツインテールの少女だ。

「あらお姉様、誰とお電話ですの？ま・さ・か、あんの腐れ類人猿ですの？」

彼女は白井黒子。自称御坂の露払いである。

「ちちちち、違うわよ。大体、あんなやつもうどうでもいいのよ…」

「あらそうでしたの？ならばもうお姉様は……うふふひひひー。ってごぶぉ。」白井はこんな感じでいつもわかりやすく御坂にアタ

ックしているのだが、いつも迎撃されている。

「毎度毎度欲望がダダ漏れなのよアンタは…」

「今回は健全な妄想でしたのに…それよりお姉様、外出の準備はできましたの？」

「ああ、大丈夫よ。いつでも出れるし。」

「ではそろそろ行きましょう。初春の家でお蕎麦をいただいてから初詣ですので。」

「そうね。」

「もう。お姉様ったらつれませんのー。そんなに黒子と愛のカウントダウンするのが嫌ですのぉ？」

（あいつも…こんくらいわかりやすければいいのに…）

どこか上の空な御坂は白井に引っ張られ、寮を出る。

無能力者は何を思う。（前書き）

今回もインさんの扱いが……

嫌いでは、嫌いではないんですっ。

無能力者は何を思う。

２２時３０分。

外では人の声や車の走る音が聞こえてくる。普段の学園都市ではあり得ない。というのもこの日は学園都市も深夜に臨時バスなどを出すなど、初詣という名の夜遊びに寛容である。しかしアンチスキルの巡回を強化するなど、締める所はしっかり締めている。さすがのアンチスキルでもド年末の勤務は勘弁してほしい所かもしれない。

その時上条当麻は寮にいた。大掃除を辛うじて済まし、年越しそばを全力でたいらげた所だった。

待ち合わせは２３時。まだ時間はあるがゆっくりはしていられない。彼は先ほど誘いをうけ、初詣に行く予定なのだ。

（しっかし姫神が声かけてくれるなんてな。待たせんのも悪いし、早めに行っとくか…）

「なーインデックス、お前それじゃ寒いからカイロいるかー？」

インデックスというのは彼の家の居候のシスターである。何やら魔術的にすごい重要な人らしいが話すと長いので割愛する。

「おい、インデ…はっ…」

そのインデックスは炬燵で爆睡している。「むにゃむにゃとーまとーま屋台屋台…」などと寝言まで発している。さっきまで目をキラキラさせ初詣を楽しみにしていたはずだが。夢に出てしまっているのか。

（１０万３０００冊も炬燵の魔術にやられてしまったのか……っていうか無理に起こすととんでもないんですよね……とりあえず、来年は、起こさぬようにベッドに移動させねば…）

これまで空腹時しか知らなかったが、最近では寝起きが悪いと彼女は魔術とやらでは計り知れない顎の力で上条に噛みついてくる。後、女性が絡んだ時も。この点は上条は理解しがたかったが。

（すまんなインデックス…初詣に連れていかなかった事を知った時の威力も計り知れんのだが、今俺には待たせてる人がいるんですよ。ここで死ぬわけにはいかない、その辺は流石に理解してくれますよね？）

この場合女性と2人きりということも相まって威力が5割は増すだろう事を知らない不幸な少年は彼女をそーっとベッドへと抱え連れていく。

（くっ…すまない、インデックス。

上条は彼女をベッドに降ろし、布団をかけてやる。

（朝起きたらもっかいこいつとも行ってやるか。）

こんなで上条は家をそろりと出た。

姫神秋沙のユメを叶えるために。

超能力者の出発。（前書き）

佐天さん出すと、超電磁砲も原作にいれとくべきでしょうかとか思いました。

超能力者の出発。

またも同時刻。

御坂美琴は友人である初春飾利宅にいた。

「いやー、そば美味しかったねー。さっすがは初春。そばに関して右に出るものはいないわね。」

快活な声を張り上げるのは佐天涙子。無能力者であるが、天真爛漫な中学生だ。

「え、えへへーって、そば以外も誇れるものはあるんですよ。」それに答えているのが初春飾利。頭に花飾りを乗っけている。年末仕様なのか少し和風な飾りをしている。

「はいはい、そろそろ行きませんか。」食後のやや気だるい感じを払拭するように、白井黒子が言う

「そうですねーっ。のんびり歩いていきましょーかっ。」年末でも佐天は元気である。

「御坂さん、さっきからどうしたんですか？恋煩いですか？」やや冗談気味に初春が尋ねる。

「ち、違うわよー。なんで私があんなやつのこと…って…はっ」

そこにいる三者がそれぞれに目の色を変える。

「あああ、あんなやつって、あの、髪の毛ツンツンさんですかーっ？」

「御坂さん、私は御坂さん応援しますよ！必要とあらばリミッターも解除しますよ！」

佐天、初春が女子中学生らしい反応を見せる横で一人激しい負のオーラを充満させているのが……

「ほねぇさば、ほねぇさば、ほねぇさば、ほねぇさば。」

「ちーがーうって言ってるでしょ？もー早く出ようよ…」

早くこの話題を切り上げたい御坂だったが佐天と初春がそれを許さない。

「御坂さんっ、もしかしたら初詣中に会えるかもしれませんよ？近くなんですよね？行くとこ一緒だったりしたら。」

「そうですよ！その時私達は少しくらいなら空気は読みますよ？白井さんなら私が抑えておきすから。」

「ほほう……たかが初春ごときにお姉さま絡みの私を止められるとでも？」

このままでは折角モヤモヤを吹っ切ってきたのに、また蒸し返してしまうと感じた御坂は

「もう。私は今日はみんなと過ごしたいからここに来てるの。だから、あいつの事は今はいいから、ね？早く行こ！」

少し怒るように、それでも最後には優しく告げる。

「……ということはとうとう黒子だけを見てくださる…という認識でよろしいですのね？」御坂に飛びつく白井。

「だーかーらーなんでそうなるのあんたは。」

「あ、そんなこんなしてたらもう１１時ですよ。ホントにそろそろ行かないと！」

そんなこんなで、御坂達も初詣へ出かける。

待ち合わせも移動時間もデートです。（前書き）

姫神さんをどんどん好きになります。

待ち合わせも移動時間もデートです。

２３時。

姫神秋沙は自身が通う高校の前にいる。何か落ち着かない様子だ。そこへ…

「ふぃー。よっす。ギリギリってとこだなー。」上条当麻が息を切らせて現れる。そして彼一人しか見当たらない。

「あれ。あのシスターは。」もしかして本当に気を遣ってくれたのかと甚だしい勘違いをしつつ尋ねる姫神。

「ああ…あいつ寝ちまってさぁ。起こしちまうとこんなド年末に大量出血で死んでしまうなんてことに…」

「じ、じゃあ上条くんと２人…？」

「ん？なんかまずいか？吹寄でも呼ぶか？」

彼がクラスメートを呼ぼうと提案し、姫神はしばらく沈黙していた

が、吹っ切れたように

「……いい。…2人でいこう。」2人で、の前に何か聞こえた気がした上条だが追求することなく

「んじゃ、行くか！って、どこの神社に行くんだ？」

「霧ヶ丘女学院の近くにある所が私的におすすめ。」

「おし、改めて行きますかー。」

近くのバス停からバスに乗り上条達の住む第7学区から第１８学区を目指す。

バス内では2人の他愛ない会話が繰り広げられた。上条が最近覚えた料理の話や、姫神のクラスでの立ち位置などを話したりした。そうする間に霧ヶ丘女学院前まで到着していた。

バスを降り残りの道のりは徒歩。参拝客らしき人もちらほら見受けられる。しばらくすると小さな神社に着いた。小さな割にはしっかり参拝客を迎える準備がなされていた。

「大きな神社は第１２学区に集まってて、たぶんそこは人がいっぱいそうだから。ここは穴場。」

「確かに人少なそーだな。さすが元巫女さん。事情通だな。」上条は感心する。

「私。巫女さんじゃない。魔法使い。」

「なっつかしいセリフだな。あん時はマジで何だこいつと思ったよ。」

あん時とは上条が姫神と初めて会った時だ。ファーストフード店で食い倒れていた姫神と相席していたのである。

「色々…あった。」少し遠い目をしながらまたこれまでの事を思い出す。境内の端の方にある石段に座り込み話を続ける。さながら人気のない場所を選ぶカップルの様だった。

「まさかクラスメートになるとはな。」苦笑する上条。

「あの日の薄いリアクションは一生忘れない。」

「いや、その、それはですね…っと、今何時だ?」

「あ。あと2分で来年。」腕時計で時間を確認する姫神。

「折角だし、カウントダウンでもしようじゃありませんか。」携帯を取り出し、時報にダイヤルする。

そわそわする姫神をよそに20秒前からカウントする上条。

ああ、本当に誘ってよかった。彼と2人で年越しまでできるなんて…彼を横目に見ながらそう思っていた。

「ごー、よん、さん、に、い…ごほぉ！」

しかし最後の最後を言い切ることなく上条は姫神の視界から消えた。後ろから何者かが上条を吹っ飛ばした。

また？またなのか？また彼女のユメを何か大きな出来事が奪おうとしているのか。不安を胸に振り返ると、一人の女子中学生が立っていた。

神社でドロップキックとはなんて罰当たりな。（前書き）

そういや姫神さんと御坂さんって一回ニアミスしてるんですよね。

神社でドロップキックとはなんて罰当たりな。

御坂達は歩いていた。奇しくも上条達が向かった神社と同じ所を目指して。彼女達も今年あったことを話していた。

「いやー今年も色々ありましたねー。私なんか一時昏睡状態なっちゃったしー。」

「笑い事じゃないですよ佐天さん。あの時は本当どうなるかと思いましたよー。」

佐天はレベルアッパーというものを使ってしまい一時的に昏睡していた。

「わたくし的には初春が腕立て伏せ一回できるようになったのが感動いたしましたわ。最初はドーピングかと思いましたけど。」

「すごいじゃない初春さん。今度私にも見せてよ。」

「はいっ。その時はリミッター解除するんで１０回でも１００回でもお見せしますよ御坂さんっ。」

御坂は初春が腕立て伏せができるようになったのを知らなかった。しばらくロシアに行っていたた時だったからだ。

（今年…か。みんなと出会えたのと……あの馬鹿のせいで退屈しない一年だったわね…本当に。）

「御坂さんは、今年は何が一番印象に残ってますかー？」底抜けに明るい口調で佐天が訊ねる。

「あ、あたし？あたしは…やっぱり佐天さんと初春さんと仲良くなれたことかな。うん。」

「なんか面と向かって言われるとはずかしーですよー。」御坂の肩をバンバンと叩く佐天。

「あたし、本当に嬉しかったよ。２人共仲良くしてくれて。」

「いつでも頼ってくださいね。御坂さん。」初春は胸をドンと叩く。

「ほねぇさば…黒子は、黒子のことは気にもかけてくださいませんのね」

「黒子も。みんな頼りにしてるって。本当だよ？」

それは嘘ではなかった。しかし、やはりあの馬鹿のことだけは話せなかったのだ。

「あっ、見えてきましたよー。」初春が明るくなっている神社を指差す。

「結構かかってしまいましたわね。もう後１５分で日が変わりますわ。」

とりあえず神社の鳥居をくぐり、少し散策する御坂達。

「うぁー、私こういうの初めてで、なんかワクワクしますね。」

「言われてみればそうですわね。中学生になった特典みたいなものでしょうか。」

夜中に外出というのがなかなかできない学園都市では貴重な時間である。また年次が上がったことも影響しているだろう。

「あ、、あたしちょっとトイレ行ってくるね。」

「もうすぐカウントダウンですから、早く戻って来てくださいな。」

御坂は手を挙げるだけの返事をして集団から外れ、トイレへ向かう。

「うっ。やばっ、もう時間が。」

皆のもとへ戻ろうとした時だった。御坂は目を疑う。さらりと長い黒髪の女性と並んで座るツンツン頭の後ろ姿を見つけたのだ。

（あ、い、つ、は、ぁ…人の気も知らないでぇぇ…）

一瞬にして我を忘れ、ふるふると肩を震わせ一直線に彼の背中めがけて駆け出す。そして、もし人違いだったらという懸念もなく、ドロップキックを見舞う。同時に年が明ける。なんという新年だろう。

その数秒後に初めて姫神と御坂は目を合わせることになる。

薄幸少女と超電磁砲。（前書き）

心理状態を描くのがむずかしいです

薄幸少女と超電磁砲。

姫神秋沙と御坂美琴はほんの数秒だけ目を合わせた。その後、御坂は何が起こっているかわからず戸惑う姫神より先にぶっ倒れた上条のもとへ向かう。

「ってて…畜生…新年最速で不幸だ…誰だ？」彼が振り返ると、とんでもない形相の御坂美琴を視界に捉える。

「あんた！こんな所で何やってんのよ。」

「何って…いや、年越しからの初詣っていうお決まりのイベントですけど…」起き上がって頭をさすり力強なく答える上条。

「そんなこと聞いてるんじゃないわよ馬鹿！」御坂はずいと上条に近づき胸をぽかぽかと殴る。

「えっと…あの…御坂…さん…？」突然の事態に上条も状況を把握しきれていない。ふと御坂の顔を見ると目に涙をためている。

「あんたは、あんたは……」最後はもう言葉にならず彼の胸に顔を押し付けてしまっていた。

その状況をを見ていた姫神はどうなっているのかわからなかった。どうすればいいかもわからなかった。ただ呆然と立っていた。

今日はせっかくとりつけた彼とのデートなんだからさっさと立ち去れ、などとは言えるはずもない。かといってこのまま立ち去ってしまえば彼は探しにくるだろうし、迷惑になってしまうとも思った。

しかし姫神はふと思った。今、自分より彼の事情を知っているであろう人間が現れた。その人から、彼のこれまでのことを聞いてみたい。彼のいた世界を少しでもよく知りたいと。

上条本人からは今まで詳しくは何も聞いていない。心配させまいとした彼なりの配慮かもしれない。なので姫神も追求しなかった。

でも今は。自分は彼に心配だったんだと伝えたい。心配に思う人がいるんだと伝えたい。何を危ないことをしていたんだと叱りたい。きちんと事情を理解した上で。

姫神は上条に向かって進みだした。上条は必死に弁明する。

「ひひ、姫神さん、これはですね、別にその、決してですね…」

「上条くんは。ちょっと黙ってて。」

「…は？」

「私はこの人と少し話したい。」姫神は御坂を上条からひっぺがしてそう伝える。

「えーと…姫神さん？」

事情がさらにこんがらがる上条だったがここは彼女に任せようと思った。

「いいかな。えと。」

「…御坂です。私も友達待たせてるから…ほんとに少しなら。」ひっくひっく言いながら御坂は答える。逆上するんじゃないかと心配していた上条もホッとした様子を見せる。

「よかった。上条くんは、しばらく適当にぶらついてて。終わったら連絡する。」

「あ、ああ。」

未だ状況をつかみきれない上条はふらふらとその場を離れていく。

「さて。何から聞こうかな。」

御坂も内心はビビっていた。この人と上条が一緒にいる時間をぶち壊してしまったのだから。っていうか一回見たことがあるようなないような影薄すぎだから印象に残ってないけどこいつは結局上条のなんなんだろうという不安もありながら、奇妙な組合せのガールズトーク??が始まる。

年始は会いたくもない人にまで会ってしまいますの。（前書き）

初天コンビも好きです。

年始は会いたくもない人にまで会ってしまいますの。

「新年早々不幸すぎる…」御坂、姫神と別れ、辺りをうろつく上条。

「んー、姫神もなんか考えてるっぽいしなんとか大丈夫そうだけど、御坂が逆ギレとかして修羅場ったりしねぇかな…ってか何話すんだあいつら…」

心配になりながらも、女性のサシの話に自分はいない方がいいだろうと思い戻ることはしない上条。そこへ頭に花飾りをつけた少女と黒いやや長めの髪の少女が話しているのを見つける。

「御坂さん、どこいっちゃったんでしょう…一緒に年越せませんでした。」

「んー…あ、もしかしてツンツンさんと出会ってそこいらでイチャイチャしてたりとかしてたりとか？」

（ん？御坂？御坂の友達ってのはあの子達かな？）

「そんな事が万が一にも起こったら私はあやつをぶち殺しますのよ。おほほほ。」

最後に聞こえた声が決定打となる。隠れて見えなかったがツインテールの少女の声だ。

（お、白井じゃないか。御坂の言ってた友達ってのはやっぱりあの子たちか。）

まさか話題が自分の事とは思わず、知り合いを見つけた上条は何気なく声をかける。

「白井ー。あけましておめでとう。」

「あら。おめでとうございます…って、どうしてあなたがここに？ま、さ、かお姉様に会いにきたとでも言うつもりですの？」

「いや、御坂にならさっき会ったんだけど…」

「まぁぁぁ…私よりも先にお姉様に新年の挨拶をするなんてどういう了見ですの？マジで殺す今殺す。」白井に首を締め付けられ揺さぶられる上条。助け船が出たのは白井の連れの２人からだった。

「あの、御坂さんはどこに？」頭に花飾りをつけた少女が訊ねると、白井も手を離しさっさと場所を吐けみたいな顔をする。

「ぐぇっほ…あいつは向こうだけど、今は取り込んでるから…その、ちょっと会いにいくの待ってやってくれないかな？」それを伝える

だけのつもりだった。それで首を締められるのはやはり天性の不幸体質なのか。

「取り込み？誰と何の要件ですの？」

「さあ、なんか俺の友達と話をしてるみたいだけど…なんなら一緒に時間潰すか？」

「なんでわたくしがあなたごときと。それにこちら2人と面識はないのでしょう？」

「あーまぁ、そうだけど…」

「いえっ。是非ご一緒しましょう。」

「私たちも、色々お聞きしたいことがあります。ありますっ。」連れの2人ににペースを強引にもっていかれる。

「ちょっ、あなた達、どういうつもりですの？」

白井の介入を無視し、互いに自己紹介している3人。

「あたし、御坂さんの親友やってます佐天涙子ですっ。今年からよろしくですー。」何か新年の挨拶も交えられている気もしたがあま

り気にはしなかった。

「おなじく、初春飾利です。今年からよろしくお願いしますっ。」

「あ、はぁ。上条当麻です。どうぞよろしく…」完全に向こうのペースに飲まれながら上条も挨拶をする。

「も、もう知りませんわ…なんでこんなことに…」嘆く白井をよそに何故かはりきる2人と共に出店などの方に向かう

これまた奇妙な4人が交わることとなった。

薄幸少女と超電磁砲。２（前書き）

まえがきって何が必要なんでしょうか。

薄幸少女と超電磁砲。2

「さて。何から聞こうかな。」

「聞くって…何をよ…そもそもあんたはどこの誰なの？」

「私は姫神秋沙。上条くんのクラスメート。因みに席は彼の前。ふふふ。」

「ふぅん。私は御坂美琴。常磐台中学の2年。あいつとは…腐れ縁。で、クラスメートさんが私に何を聞くの？」

「彼が学校をよく休んでいた事情を知りたい。」

「は？あいつから聞いてないの？」

「うん。何も。そういう性格だから仕方ないと思ってるけど。こっちの身にもなってほしい。」

「まったくそうよね。いっつもいっつも。第22学区でフラフラだった時に説教したのに聞かないし。」

「…」

「気づいたら外国にいることもあったわよ？」

「外国に？」

「なんかフランスにいて一回帰ってきたと思ったら、イギリス行って、戦時下のロシアにいたみたいよ。ロシアには私も行ったんだけど。なんかとんでもない所にいて。だぁー思い出したらムカついてきた。今度絶対に説教なんだから。」

自分の思っていたことより遥かに違う次元で展開される話に姫神はさすがにうろたえた。自分なりに彼が戦う理由はわかっていたたつもりだったが、根底から覆された気分だ。

しかも何かと自分より一歩も二歩も進んだ所にいる御坂を羨ましくも思ってしまう。

「そんな危険なこと。どうして。」

「さあ。どうせ真意なんて聞かれても教えないでしょ。あーいう性

格だから。」

「…そうだよね。だから苦労する。」

（み、妙に話が合うわね…まさか、この人あいつに助けられたクチ？）

「姫神さんはあいつに助けられたりしたの？」

「え。うん。」

「頼んでも、ないのに？」

「なんでわかったの。」

「はぁぁぁ。またか。」

「また。とは。」

「いや。あのシスターといい見境がないのよ。あいつは。」

「やっぱりそうなのね。」

「「はぁぁ…」」

同時にため息をつく2人。何か対照的な気がする2人だが妙な所でシンクロしている。少しの間をおいて。

「御坂さんは。彼をどう思っているの。」どういう思惑があったのかわからないが、ストレートに姫神は聞いた。

「ぶっ…え？あたしが、あいつを？どうって…え？どう…」自分の気持ちに気づいてはいるはずだが、うまく言葉にできない御坂に対し姫神は。

「私は。彼が気になる。」

「…っ。な、何よ。それ。」顔を真っ赤にしている御坂。

「彼をもっとよく知りたいと思ったから。あなたに話を聞こうと思った。」

「そ、そうなんだ。でも私もこんくらいしか知らないわよ。もっと

色々あるのかも…」

「私はあなたの“こんくらい”も知らなかった。」

「…」

「少しは彼の事を知れた。ありがとう。後で説教する。これで横並び。」

「横並び？ってか何言っても無駄よ。きっと。また何かあったら首を突っ込むに決まってる。」経験者の言葉には説得力があった。

「でも私は。伝えたいから。伝える。あなたがそうしたように。」

「そっか。」御坂は目を閉じ、少し微笑んだ。どういう思いでいたのかはわからない。何か安堵した様子ではあった。

「それより。ごめんなさい。いきなり。」

「ん？ああ、いいのいいの。私こそいきなりごめんなさい。」初対面の姫神に対し異様に自分を出せることに驚きながら御坂は更に言う。

「さっきの答え、あ、あたしも…その、あ、あいつが…」

「なんとなくわかる。」制するように姫神が言った。

「…そゆことよ。」

それ以上追及する気はないのか姫神は少し微笑んで、

「そろそろ。戻ろう。」

「もういいの？」

「うん。ありがとう。」

（何か姫神さんのペースにはまりそうだった。何でも話してしまいそうだったな。）

御坂はそう言われると照れ臭そうに頬を掻きながら立ち上がりそそくさと立ち去ろうとした。

「じ、じゃあ。」

「あ。御坂さん。私――――――」

最後に聞こえるか聞こえないかギリギリの声量で何か言った姫神。

御坂は聞こえたのか聞こえてないのか、そのまま走っていった。

年始は会いたくもない人にまで会ってしまいますの。２（前書き）

白井さん、乱れます。

年始は会いたくもない人にまで会ってしまいますの。2

「上条さん上条さん、りんご飴売ってますよー。」初春がイカ焼きを頬張りながら呼びかける。

「んーああ。昔腐ったりんご飴食ってとんでもない腹痛になったことがあるんですよね…」

「なら上条さん、ベビーカステラにしときましょうよー。」りんご飴に怯える上条に佐天が提案する。

（こいつら、人当たりが良すぎやしませんか…まぁいいんだけどさ。）

「初春、こんな時間にそんなに食べますと太りますのよ。」

「えー？なんにせよ白井さんよりは痩せてるんで大丈…ぶぇ…ギブ…ギブですすみません…」白井は初春をホールドする手を緩めた。

「次そんなことを口走りやがりましたらその類人猿をぶち殺す弾丸にしてさしあげますの。」

「って俺も殺されるの？」

「当たり前じゃありませんの。これまでの所業を顧みてごらんなさいな。」

「…少なくとも白井に殺されるようなことはしていない気がするぞ？」

「どこまで鈍感ですのこの腐れば類人猿。はぁぁ。」

「まぁまぁ、そうケンカなさらずにー。」佐天が仲裁に入り、そのまま上条に訊ねる。

「上条さんはー、御坂さんについて、どう思いますかー？」

「は？御坂について？」上条は少しだけ顔を赤らめながらも冷静に返答する。

「いやーなんか、たまーに御坂さんがたぶん上条さんのこと話した

りするんですけどぉ。」

「はっ。どーせまたあの馬鹿がどーとかびーびーおっしゃってるのでしょう。いくらお馬鹿の上条さんでも大体わかりますよ。」

「いやーでも御坂さん、その時はすごくイキイキしてるっていうかぁ。」それを聞いて背後では白井が顔面を石畳に打ち付けている。

「で、上条さんからしたらどーなのかなって思ってですね。」

「ん、んー…」頬を掻きながら照れ臭そうにこれまでを振り返ってみる上条。ワクワクしながら佐天はいつの間にか横にいた初春に耳打ちする。

（このリアクション…初春、分析よ、分析するのよ。）

（リミッター解除ですから。これは…なかなか読みづらいですね…）

（でもなんか照れてるよね。）

上条はひそひそ話す2人を見ずに切り出す

「あいつは…俺の…守るべき人…だな。」

「と…言いますと？」佐天と顔を見合わせ初春が訊ねる。

「いや、あるヤツと約束しててさ。御坂とその周りの世界を守る…ってさ。」

「ほほう。じゃあ大事な人なんですね。」

「まぁ。そうだな。あ、その周りもだから、君らがヤバい時は守らないとな。」

「あ、あの、それ以上の感情とかってのは、なな、なかったりするんですかあ？」

佐天が恐る恐るながらストレートに核心に迫る。

「…さぁ。わっかんねーや。ま、何にせよ守るべき存在には変わりねーかな。」

「そーですか…なんか変な事聞いてすみません。」

「いーや。でも、なんとなくなんで暇潰しに付き合ってくれたのかは理解できたよ。」

「え？」

「なんでも。俺が言うのもあれだけど、御坂とずっと仲良くしてやってくれよな。俺がいなくても大丈夫なように。」

佐天はその言葉の本意を理解できなかったが、とりあえず頷いた。

そこへ御坂が走って戻ってきた。

「ごめんごめーん……ってなんであんたがここにいるのよ。」

「いや。まぁその、あなた方が取り込んでる時間を潰すのに協力していただいてですね…」

「あっそ。姫神さん、向こうで待ってるわよ。早く行きなさいよ。」

「え、あ、おう。」何か御坂に違和感を感じるが、慌てて御坂が走ってきた方を向き直り進もうとすると、すれ違う瞬間に服を掴まれた。

「あ、あんた。」

「ん？」

「こ、今年は、あんたのこと、な、名前で呼ぶから。わ、わかった？」御坂は目を合わせず、そっけなく言った。

「…そうか。んじゃ今年もよろしく。美琴さん。」

上条は今度こそ姫神の方へ駆けていった。残された御坂は顔を真っ赤にした。

（ーっもう、と、とととーまは！そりゃあんなこと言われたら…私だって。）

「御坂さん、誰と話してたんですか？」初春が訊ねると御坂はコンマ２秒で顔を戻して

「ん、ちょっと強敵と。かな。」話した事を反芻しながら答える御坂は、少し大人びても見えた。

「ともあれ、やっと御坂さんが戻ってきたんで、おみくじが引けますよー。」佐天は一年最初の運試しにワクワクしていた。

「ほら、白井さん、御坂さんも戻ってきましたから、おみくじ引きますよー。」

「ほね…ほねぇ…ほねぇさば…。」額から大量の血を流しながら立ち上がる様はゾンビである。

「黒子、ごめんね。」

御坂が頭を撫でると白井は生気を取り戻す。

「今年は私、お姉様の風紀を守ることに専念しますの。」

「はいはい。さ、早く引くわよ。かかってきなさい大吉でも大凶でも何でも。」

（なんか御坂さんテンション高くない？）

（さ、さあ？何かいいことでもあったんでしょうか。）

４人はおみくじを引き、夜店を少し回り、帰路につくことにした。

運だめし。（前書き）

尻すぼみになっちまいました。

運だめし。

姫神はしばらくぼーっとしていたが、上条に連絡することを思い出した。しかし彼はもう戻ってきた。

「おーい。何話してたんだ？お前ら。」

「ちょっとしゃがんで。」

「は？こうか？」

姫神はグーを作り拳に息を吐き、上条の脳天を殴った。

「ぐぇ…っててて、何すんだよ…」

「ばか。ばか。ばか。」

「あなたの事だから。危ないことに首を突っ込むなとは言わない。けど少しは。自分を大事にして。あなたが誰を守ろうが自由だけど。あなたがいないと辛くなる人がたくさんいることも考えて。」

「そっか。だいたい…聞いたんだな。」

「わかったら。返事は。」

「はい。すみませんでした…」

「まったく。信用できない。」

「あ、あはははは…」

「まぁいい。それより。おみくじを引こう。」

「上条さんは生まれてこのかたすら吉という文字をみたことがあり

ませんのよ。」

「私の運もわけてあげるから。引こう。」

「姫神さんもどっちかってーと不幸体質なような…ってその握りしめた右手を解除してくださいすみませんでしたあああ…」意外とパワフルに振られる右手から逃れながら気になったことを聞いた

「姫神、御坂に何か言ったか？」

「それは秘密。」

「…そうか。んじゃおみくじ引いて、なんか食って帰りますかぁ。」

「うん。」

今までの人生でおそらく一番幸せな時間をこれから過ごせると思うと、姫神は最大級の笑顔を上条に見せないように作った。

新年は決意が新たになります。（前書き）

完結です。

新年は決意が新たになります。

帰り道。佐天と初春と別れた後、御坂は姫神が最後に放った言葉とおみくじの結果を反芻していた。

（何よ。恋愛運『敵多し』って。わかってるっつの。）

（はああ。クラスメートか。学校始まれば毎日会えるのよね…一気に距離が縮まるなんてことも…）

（いや、冬場は何かとイベントが多いから、コツコツいけば…とりあえずバーゲンには付き合ってもらうとして…）

「お姉様？先程から何をお考えで？」

「え？あ、いや別に。」

「まったく、ちょっとは黒子の事も気にかけてくださいな。それより、今年は黒子とバーゲンに行きませんか？」

「う、え、あ、今年は…ちょっと、ゆっくりしたいかなー」棒読み

になる御坂。

「あらそうですの。なら正月は自室でまったりイチャイチャですのね。う、うふふふ。」

「あんたはまたすぐ…」抱きついてくる白井を押さえつける。

（と、とにかく今年は自分に素直に…）

そう決意した御坂は寮に戻ってきた。しかし、浮かれていた白井が外出届けを出し忘れたせいで正月を返上する羽目になってしまった。

――――――――――――――――――――――――――――

姫神と上条も帰路についていた。

「やっぱり今年も大凶でしたか…わかってはいたものの…不幸だ。」

「私。大吉だったからこれでチャラ。」

「チャラってったってなあ…。」

「とりあえず。冬休みの課題。手伝う。」

「…え？」

「上条くんは。留年スレスレだから。３学期神がかり的な成績とらないと。一緒に進級できない。」

「…まさか家庭教師になっていただけると？」

「吹寄さんにも。頼むから。」

「どちらかというと吹寄さんは遠慮したいなぁぁ…なんて…」

「だめ。厳しくいくことにした。」

「はぁぁ。今年も不幸が絶えなさそうだ…」そういいながら上条は少し微笑みを浮かべた。

一緒に進級して、また一緒のクラスで生活したい。新しい夢に向かって、姫神秋沙は今年は少し積極的になろうと思っていた。そんな決意と共に、彼女の新年は始まる。

新年は決意が新たになります。（後書き）

どうも。今回のお話はこれでおしまいです。
何やら尻すぼみになってしまった感が否めません。

今回はあまりにスポットの当たらない不憫な姫神さんにちょっとでも幸せになってもらおうと思いやりました。

人気者の御坂さんと交えることでうまい具合に光が当たってくれていればいいんですが。

感想書いてくれる人本当にありがとうございます。励みになるので、今後ともよろしくしていただけたらなぁと。

次回は魔術サイドでもやろうか・・・

というわけで今回はこの辺で失礼することにいたします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0221q/

美琴と巫女とは好敵手？

2011年9月6日17時00分発行